

実習事前指導としての指導実習

— 実習力アップに焦点をあてて —

秋山ゆみ子 井口美和 河邊貴子 大西道子



Provided by Sapporo Otani University Repository

[Metadatum, citation and similar papers at core.ac.uk](https://core.ac.uk)

要旨

保育者をめざす学生たちが実習力を高めるには保育・教育実習に向かい、有意義な実習となるように意欲を持って臨むことが基になると考える。授業「保育技術演習」の中心をなす附属幼稚園におけるグループでの指導実習において、実習のどのような場面でどの様に意欲や自信が生まれるのかを実習終了後の振り返りのレポートから迷いや意欲喪失に繋がった内容との比較も加えて考察した。その結果、意欲や自信の多くは計画・準備段階では、仲間と共に子ども達との楽しさを共有する姿をイメージしながら進めることが出来たかどうか、実践段階では、一緒に楽しめた体験・多様な子どもの反応や行動に驚き感動を持って対峙した経験・観察者としての客観的な視点からの気づき、更に振り返り段階では子どもの行為の奥に潜む気持ちの話し合い・観察者や担当保育者からのほめられ体験・失敗感を次回への向上心へと繋げた体験などが実習力となり意欲に繋がっていくと考察した。

キーワード：グループ実習、実習力アップ、意欲

1. はじめに

保育者を志す学生にとって専門職としての資格を得るために避けては通れない重要な学びの体験が実習である。一人ひとりの今までの学びを実践できる絶好の機会ではあるが学生の多くは大きな不安と少しの期待(楽しみ)を持って実習へと臨むのが現状である。実習前の学生たちの様子は「実習が怖い」「上手くいくだろうか?」「ケンカの対応はどうしたら良いのか?」「指導実習で子ども達の年齢に合った楽しめる内容は?」など漠然としたものや、より具体的な内容など不安は膨らむばかりである。実習を前に不安を持たない学生はいないであろう¹。河邊(2006)は「保育者は子どもに関する理論を踏まえた上で、日々子どもと接する中で、子どもを理解する力や実践力を高めていく。保育者を目指す学生にとって、実習は初めてのフィールド学習である。……自分の目で見て、耳で聞いて、現場の空気の中で様々なことを感じて欲しい。決して小手先の保育技術を獲得することだけを焦ってはならない。最も大切なのは子どもを理解する力を高めることだ。」²とフィールドで学び取ることの重要性を述べている。

本学での2年次科目「保育技術演習」は概念的になりやすい保育学を現場で実践してみる実習体験を取り込んだ演習授業である。プロの保育者として通用する子ども観・保育者観・保育観等の形成、子どもに寄り添いその成長・発達を援助する保育技術の工夫・体験をめざして、河邊の言う保育者への成長過程となるよう授業を構成している。その変容過程はエピソード研究の形で保育学会等で発表してきた^{3,4,5,6,7,8,9}。学生たちは2年間の中でそれなりの子ども観・保育者観・保育観を獲得していることが分かる。しかしここで得ているものはたとえ実習という現場(附属幼稚園)の子ども達との関わりで得られたものとはいえ、グループという仲間との「役割分担の中で」や、観察という関わりからである。これを個々が自立した形で力をつけるべく学外での保育・教育実習でさらに磨きをかけることになる。しかしこの学外での保育・教育実習を契機に保育職への進路変更も起こっている^{10,11}。目前に迫る保育・教育実習に臨もうとするときの学生たちの不安は個人差があるとはいえ大きなもので、特に指導実習に不安を感じている。実際実習後の調査で不安を解消するには、「ほめられ体験」や「現場保育者との信頼関係」が保育職への期待に繋がっていたことを保育学会第67・68回大会^{10,11}で報告した。保育学会第69回大会では実習力とは実習までに培ってきた技術や理論であり、現場で実践する学生レベルの保育力と位置づけ、知識・技術と実践のギャップに気づき、自覚しそのギャップを埋めていく努力をすることが実習力アップに繋がると報告した¹。即ち、学生ならではの新鮮な気づき・驚き・想像力・創造力・向上心・探求心・行動力などに支えられて保育者としての成長を追求していく力である。単に保育技術を学ぶことに終始するのではなく、子どもとは、保育者とは、保育とはなどの保育の基礎を学ぶ力であり、それらの学びを意欲を持って臨むことが実習力として発揮されると考える。本稿のテーマはこの意欲がどの様に培われ実習力に繋がるかである。市川(2015)は「普通、間違えると、やる気がなくなりますね。……ここで間違えたことによって自分は賢くなった。という実感が得られれば、むしろやる気につながる。……失敗をどう経験として生かすのかが重要なのです。」¹²と述べている。

- 1 秋山ゆみ子・井口美和(2016) 実習力アップにつながる実習事前指導—グループによる指導実習の場合— 日本保育学会第69回
- 2 河邊貴子(2006) 保育・教育実習 フィールドで学ぶ 同文書院 P1~P4
- 3 大西道子 秋山ゆみ子(2001) 観察実習の効用—観察レポートの分析から— 日本保育学会第54回
- 4 大西道子 秋山ゆみ子(2002) 観察実習の効用—観察レポートの分析から(2)— 日本保育学会第55回
- 5 大西道子 秋山ゆみ子(2003) 保育者養成における学生の成長過程—観察・参加実習における子ども理解— 保育士養成研究 第21号
- 6 秋山ゆみ子 大西道子(2006) 通年授業としての指導実習—前期4回の実習体験に見る学生の育ち— 日本保育学会第59回
- 7 大西道子 秋山ゆみ子(2010) 通年授業としての指導実習—振り返りの実践— 日本保育学会第63回
- 8 大西道子 秋山ゆみ子(2011) 保育実習生の記述するエピソード—保育者として成長するために— 日本保育学会第64回
- 9 大西道子 秋山ゆみ子(2012) 実習から学ぶ保育者の専門性—年中男児「R」の「イスないの?」エピソード事例を通して— 本学紀要第42号
- 10 秋山ゆみ子(2014) 実習体験後の保育者志向の変容について—幼稚園教諭への変容に焦点をあてて— 日本保育学会第67回
- 11 秋山ゆみ子(2015) 実習体験後の保育者志向の変容について(2) 日本保育学会第68回—「迷い」からの変容に焦点をあてて—
- 12 市川伸一(2015) 「学ぶ意欲の心理学」 PHP 新書 p214~p215

13 倉橋惣三(1965)『育ての心』
倉橋惣三全集第3巻 フレー
ベル館 p.51

14 津守 真(1997)『保育者の
地平』 ミネルヴァ書房
p.293~p.294

この失敗体験が個々の学ぶべき内容となり経験としてどの様に活かしていくのかがギャップを埋める努力である
と考える。成功体験のみでなく失敗したことが自分にとってプラスになったと気付けることが重要である。この
気づきは振り返りからより自覚できると考える。振り返りの重要性を津守は『保育者の地平』の中で「保育の実践と
省察とは切りはなすことができない。……それは他人の角度から同じ保育を見直す機会であって、自分の狭い視
野を広げてくれる」¹³、倉橋は『育ての心』の中で「子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのは
ひと時。大切なのはそれから……此の反省を重ねていける人だけが、真の保育者になれる」¹⁴と振り返りが意欲や
保育者の成長に不可欠とする。授業でのグループ実習(5参考資料)ではこの振り返りに重点を置き、ビデオでの
振り返り、附属幼稚園、学内省察会さらには個々のレポートと丁寧な振り返りを重ねている。

本稿は前述の日本保育学会第69回発表からの継続である。附属幼稚園との連携で行うグループでの指導実習を
実習事前指導と位置づけ、グループによる指導実習後の振り返りレポート分析から意欲を生み出す実習力アップ
という視点で考察を進める。

2. 考察の材料

1) 対象

2016年本学保育科 2年生 105名

2) 分析資料

2016年5月 グループ実習1回目終了後 振り返りレポート 回収率100%

2016年6月 グループ実習2回目終了後 振り返りレポート 回収率100%

2016年7月 グループ実習3回目終了後 振り返りレポート 回収率100%

*レポートテーマ(各回共通)

- ① 興味のあるエピソード
- ② カリキュラムは適切であったか
- ③ 実習生同士のチームワークは適切であったか
- ④ 準備した内容について(種類・豊富さ・工夫・創造・子どもとの関係など)
- ⑤ 省察会でアドバイスされたこと
- ⑥ 感想

2016年7月中旬 グループ実習3回終了後 意欲・自信に関するレポート 回収率 86%

*レポートテーマ

- ① 意欲・自信に繋がったエピソード
- ② 意欲・自信に繋がらないエピソード

3. 事例考察

取り上げた事例は全て、実習・省察会終了後のレポートであり、主たる内容が準備段階の時点でのこと、実践
中の内容、省察会があってこそ分かったり感じたりしたことにより区分し考察した。

意欲・自信に繋がったと感じた事例 意欲・自信に繋がらないと感じた事例

*事例タイトルは筆者加筆 内容は原文のまま記載

*下線筆者加筆 意欲・自信に焦点をあてた内容

準備段階

① 話し合い

事例1 「早く保育士になりたい」 3回目実習生(意欲・自信)

グループみんなで子ども達がどのようにしたら楽しめるのか、どんな危険が想定されるか、自分たちが決めたねらいなどにどういう風に近づくことが出来るか、準備段階で話していると、グループ実習当日がとても楽しみになったし、就職した時にもたくさん話し合いをすることによって、子どもが楽しんでる姿を見たらやりがいをととても感じるんだらうなと思うと早く保育士になりたいと思った。

<考察>

実習を計画するうえでテーマに沿ってねらい・内容・子ども達の行動を想定・環境構成・言葉掛けなど様々な話し合いをすることは実践へのイメージが出来上がっていくスタート時の重要な段階である。実習に向けてグループの一人ひとりが考えるそれぞれのイメージを子ども達と楽しさを共有したいというひとつのねらいに向かって話し合いを重ねることでメンバー同士の協力関係がより深まり話し合う事の重要性や充実感を感じ実習当日への期待感が生まれている。自分の気持ちを伝える力・相手が伝えたいと思うことを肯定的に理解しようとする力・信頼関係を築く力などのコミュニケーション力を身に付けそれらが大きな実習力となっているとも言える。更に子どもの楽しむ姿をイメージすることで将来の保育者としての姿も意欲的に捉えている。

事例2 「最初の一步が決まらな～い」 2回目実習生(意欲・自信)

なかなかグループ内で最初の一步となるべき大きなテーマが決まらず、やりたいこと、これはどうだろうと様々な案を一人ひとり出してはいたが、よし、これでいこう！と全員で納得するまでにととても時間がかかってしまったため、時間が経てばたつほどこれからやっつけけるかな大丈夫かなと少し意欲がなくなりそうになりました。

事例3 「本当にこのままでいいの？」 3回目実習生(意欲・自信)

グループ実習の話し合いの時、意見が合わなかったり、共通理解が出来ていなくて、幼稚園での打ち合わせの時に「あ…あれ??」と意見が合わなくなりました。人数が多かったこともあり、全然伝達されていなかったりしました。実習生同士の連携はすごく大切だというのはわかるのに、みんなの意見はまとまらないし、どうすればいいか本当に分からなくなりました。本当にこのままでいいのかな、このままで本番向かえるのかなとすごく不安になりました。

<考察>

2, 3ともにスタート時点の話し合いがスムーズに進まないことに不安を感じ意欲が失われた事例である。実習前の不安感とはこの様に次々と不安要素が浮かんでくる物なのであろう。学生の多くが不安の差はあるが限られた時間の調整やアイディア不足感のなかでコミュニケーションがうまく進まず、イライラを募らせていくのは現実である。同じ保育者を目指す学生ではあるが個々の意欲に差があることは当然ありグループ内の構成でリーダー、サブリーダー、フォロワーの存在などが重要になり個々のコミュニケーション力が発揮されていく。同じ話し合いの場面も事例1のようにグループの関係性がスムーズになると話し合うこと自体が有意義で楽しいものとなり、意欲に繋がる事例ともなり得ることが分かる。

② 環境構成製作

事例4 「子ども達の笑顔が見たい！」 3回目実習生(意欲・自信)

準備段階で、グループのメンバーでカメのオブジェを作りました。子ども達が楽しそうに遊んでいる姿や喜ぶ姿が見たかったので、製作も工夫しました。実習当日子どもが笑顔になり、興味を持ってくれたのが良かったです。製作することは苦手でしたが、これからも子どものためにという事で作る意欲が高まりました。

<考察>

実習は子ども達が楽しいと思えることが大前提である。この事例では自分たちが考えた内容で子ども達がどの様に遊び、笑顔で楽しんでもくれるかを、イメージすることが意欲に繋がり製作活動にも力が入った。更に実践でも子ども達が楽しんでいる姿を捉え子ども達の為なら苦手な製作活動も頑張れると今後への意欲にも繋がっている。楽しませたい、楽しんでもらいたいと考えることにとどまるのではなく、子どもがどんな楽しみ方をするかをイメージすることがより実習力に繋がるのであろう。指導者(授業担当)としてこのことを理解できるような準備段階の進め方への配慮も必要となる。

③ 模擬保育

事例5「もっと良く出来る!!」 2回目実習生(意欲・自信)

準備段階で模擬保育を行う時に、違う回の人たちが子ども役をしてくれました。……その時に3歳児あんず組を想定して子どもになりきってくれました。そこで難点を見つけることができたり、思いの外ここでこんなに盛り上がることもあるということが分かったりして、グループ実習当日に向けて、また当日、もうひと踏み張り頑張ろうと意欲に繋がりました。第三者の意見も聞けて、「もっと良く出来る!!」と向上心を最後まで持つことが出来ました。

<考察>

準備段階の仕上げ的に実施している模擬保育を体験しての感想である。実習生が保育者役に、他の学生が観察・参加している3歳クラスの園児役になり、作成した日案のある部分を即興的に演じ合う一種の模擬保育体験からの知見である。想定外の盛り上がり場面の体験、伝わり度の難易、子どもの姿の具体性などから実習本番での自分の動きを想定し、実習する感触がつかめた様に思えた。「もっと良く出来る!!」と向上心を持つことは実習力のひとつと言える。

事例6「楽しくない!」 1回目実習生(意欲・自信)

グループ実習前のリハーサルが全然楽しくなかったことです。日案があまり頭に入っておらず流れを確認するというよりはうさぎ(なりきり)と進行役で「何言う?どこでどうする?」という事前にしておくべき確認をリハーサルでしていたことが原因だと考えます。リハーサルが上手くいかず、そのことでグループ内の気分が下がってしまったし、前日にもかかわらず変更点が多く焦りと不安から自信をなくしてしまいました。

<考察>

準備不足のままリハーサル(模擬保育)の段階に入り、子ども役を戸惑わせてスムーズに進行できなかった事例である。グループ内の気分が落ち込み、本番を明日に控え不安感ばかりが募ってしまった。しかし事前に確認すべきことや変更点が認識されていることは模擬保育の大きな成果である。それらをグループで整理することは1つの実習力と考えたい。本人は自信をなくしたと捉えているが、事前にそれらを予測できたことは本番で突然戸惑うよりはるかに対処しやすいはずであり想定外の出来事が減ることにもなる。他方指導者(授業担当)には、ここで見られた模擬保育での失敗体験を事例5に見られたような向上心に繋がるような指導への配慮が欠かせないと考ええる。

実践段階

① 実習生

事例7「“たたく”=ありがとう」 2回目実習生(実習後振り返りレポート)

保育室での自由遊びの時に子ども達とおままごとやマジックまた絵本読みなどで一緒に遊んでいる時、その中にT君もいました。最初は普通に遊んでいたのですが、子ども達が増えてくると、様子が変わり、私の所に来てたたき始めました。その時、きっと子ども達が増えて私が他の子に関わっている時間が多くなってしまったため、甘えたいのに甘えられないという気持ちが“たたく”という形で表れてしまったのかなと考えました。

ですが、“たたく”という行為はしてはいけないことだと思うのでまずはそのことを分かってもらえるように声掛けをしました。声掛けをしてその子が落ち着いたら良かったのですが、なかなか落ち着かない為、用意していた地図(設定保育の導入で使う)に触れ、これから楽しいことするんだよと“たたく”という気持ちからワクワクした楽しみな気持ちに変えられないかと試したり様々な声掛けを試した結果“たたく”→嫌な気持ちになるものではなく“たたく”→「ありがとう」と言ってもらえる「肩たたき」という行為に見立てて声掛けをしてみると良い方向にT君の気持ちが変わったのか「もう少し優しくたたいてくれたら気持ち良いな、あ、上手、気持ち良かった！どうもありがとう」と言うたたき方も優しく変わりありがとうの後はとても満足した表情で違う事をし始めたため、この対応がT君にとってここまで影響が出るんだと思い、最後まであきらめず様々な方法で関わる事が出来て良かったなと思いました。

<考察>

年中クラス自由遊びでのT君との関わりの事例である。実習生の立場として、叩くことは良くない行為であることをT君に伝えることに一生懸命になっている。“叩く=気になる行為”としての声掛けや関わりではT君の気持ちに寄り添うことはできず叩く行為は収まらない(その時の会話が事例11で詳細に記録されている。)実習生はT君が先生に遊んでもらいたい気持ちを叩くと言う行為でしか表せないと考えている。そこで今度は叩く行為を無視してこれから行う遊びに話題を変えてワクワク感を誘おうとするが叩き行為はおさまらず、たまたま肩を叩いたのをきっかけに(事例11参照)“叩く=肩たたき”と見立て、“叩く=良いこと、ありがとうと言われること”へと発想を転換し、言葉かけをすることでT君の満足感が得られた。実習生は諦めずに様々試してみて達成感を得ている。つまりここでは叩くことは悪いことと教える、叩いていることを無視して(気をそらそうとする)他の遊びに気を向けようとする、叩くことを肯定できる方策を考え実践する、などの様々な試みである。そしてT君にとって今のそれを肯定されたことが効を奏したのである。これこそが子どもの気持ちに寄り添う努力の体験であり、実習力に繋がったと考える。

事例8 「想定外もあり?!」 3回目実習生(実習後振り返りレポート)

私はタコの玉手箱工場の色混ぜコーナーを担当しました。実習生が青の色水を入れて、子どもに黄色い色水を入れてもらい昆布エキス(緑色の色水)を作ると言うものでした。最初は順調に進んでいましたが、予想していた子どもの姿とは、違う姿をたくさん見ることが出来ました。青色も黄色も関係なく入れたり、色水を自分でくんできたり、出来上がった緑の色水を汲んで玉手箱に持って行かないで、流し口から何度も流したりと予想外なことが沢山ありました。前日に、混ざった色を溜めて見えるようにしようとキャップを付け、キャップに穴をあけて少しずつ流れるようにして、水を溜まるようにしました。溜まったらキャップを開け一気に水がパシャーと出るのでそれも子ども達に見せたら面白いと思いやってみると子ども達がとても喜んでくれてそこから水を汲んだりして色々なパターンを考えておいて良かったと思いました。今回のことを見て自分たちの想像でははかりしれない子どもの姿があるんだと感じました。子どもにとっては緑になるのもそれはそれで楽しいし、緑のものをもう一回汲んで入れるのも何でも楽しいんだと思いました。子どもが自ら考えて遊びを楽しむことはこの様なことなんだと体験しました。でも、子どもの姿に合わせて、こちらも進行をすばやく変えられたことは良かったと思いました。

<考察>

3回目園全体での水遊びの実践である。自分たちがイメージしていた遊び方とは異なる子ども達独自の遊びを展開していく姿を体験し、「嬉しい想定外」と捉えているようだ。ここでの実習力は子どもの行為を嬉しい想定外と捉えることのできる力、発想転換できる力と言えよう。そして子どもの想像力を計り知れないほどのものであると新鮮な目で感動している。この感動する気持ちも実習力である。事例7同様子どもに寄り添うとは実際にどのように関わる事なのか、“子どものすることを全て肯定すること?” “いや、そうではないような気がする”などと考える。この事例の中で“緑色になった色水を集めるのではなく流すことの方が楽しいのだ～ それもありだ!” “流すことが楽しいのなら溜めておいて一気に流したらもっと勢いがあるとおもしろいんじゃない?” やってみると“子ども達は大喜び なかなかいいねえ～”などと遊びが広がっていく。自分たちの決めた遊びの

ルールに子ども達を無理やり乗せるのではなく子どもの気持ちや活動に寄り添うことを実体験出来ている。

事例9 「楽しさの共有」 3回目実習生(意欲・自信)

何回も実験して、前日も準備して、自分たちの考えた遊びの内容はすごく単純なものだったけど、子ども達は泡プールもシャボン玉もすごく楽しんでくれたし、1回もやったことのないような珍しい遊びじゃなくても、単純な遊びでも楽しんでくれていて、やる前は2つのブースで楽しんでくれるのか不安だったけど、私たちが「泡作れるよ」とか「シャボン玉大きいね」と声掛けしながら一緒に楽しむことで子ども達も世界観に入れるし、私たちが一緒に楽しんで遊ぶと子ども達もすごく楽しそうで、子ども達の顔を見ていると本当にやって良かったです。あと、観察していた友達に「すごく良かった!」と言われたのも自分が頑張ったことを認めてもらえたみたいで嬉しかったです。

<考察>

自分たちが重要だと考え頑張ってきたことについてほめられ自己肯定感に繋がった事例である。更に3回目の実習組としての準備の周到さも伺える。特に子どもが楽しめることに重点が置かれていたと言えよう。実際に子どもたちと接してみても自分たちが共に楽しめることが子どもにとっても楽しいのだと実感的に捉えられている。またそれを見ていた観察者にもほめられ達成感に繋がっている。ここで指導者(授業担当)として事例4にもあるようにねらいをただ単に子ども達が楽しむ姿を見たい、楽しんでもらいたい、などにとどまるのではなく子ども達が遊びを発展させる余地を持つことの重要性を伝える配慮も必要である。ここでの実習力とは周到な準備、子どもと楽しむ保育への努力といえよう。

事例10 「Sさんは出来るのに…」 3回目実習生(意欲・自信)

全体的に私はあまり自信が持てるタイプではありません。そのため、メインの役割を避けていました。今回Sさんが子ども達を並ばせホールへ誘導する担当で、私は補助をしていました。その時に、着替えを保育室に置いていくことを忘れていました。Sさんは指示があった時に動じず、子どもに指示をだしていました。もし、私だったら、失敗した一と顔に出したり、不安になったりするかもしれないと感じました。

<考察>

実践での子どもとの関わりと他の実習生との比較である。自分自身の保育を振り返り不安になり、意欲や自信をなくした事例である。同じグループの実習生の臨機応変な動きに対してこのように冷静に子ども達に対応することが出来ない自信をなくしている。しかしこれくらいの不安内容はまさに経験の積み重ねで解消されるレベルと言えるであろう。自分の性格的なこと(大雑把、忘れっぽい、あがり症、引っ込み思案など)は自覚していることが多く、実践することでそこに気づき訓練していくことも実習力の穴埋めの努力である。実習力も個人差がありそこからうける刺激は意欲にもなり、事例のように意欲をなくすことにも繋がる。実践したからこそその振り返りはより具体的に自分の改善すべき点を見つけたための有意義な時間にしたと思う。

② 観察者

事例11 「私だったら…」 3回目実習生(2回目振り返りレポート)

年中組のT君がK先生(実習生)にたたいたり、けったりしていた。実習生「たたいたり、けるっていいこと?悪いこと?先生はT君と遊びたいよでもそんなことしてたらみんなもヤダってなって離れちゃうよ?けったりなぐったり(たたいたり)していたら遊べない。」などずっとT君と向き合い話していた。しかしT君は怒った様子でやっているわけではなく、かまってくなくてやっているように表情からうかがえた。そのやりとりが続きT君が肩の方(上の方)をたたいた。するとK先生は後ろを向き「T君肩たたきしてくれるの?ありがとう。」と言った。それからT君は満足げにK先生からはなれ違う先生たちの肩たたきをしていた。T君がたたきたいわけではないこと、何かに怒っている訳ではないことをしっかり把握して機転を利かせて「肩たたき」にしたことでガラッとT君の行動が変わった。すごいと思った。ささいなことかもしれないがそうやって方向を少し変えるだ

けでここまでかわることなのだなと思った。発想の転換が素晴らしい。

<考察>

事例7の場面を観察者の立場だからこそ捉えられる客観的な見方で詳細に記録している。(この場面は他の数名の観察者も関心を持ってエピソードとして記録している。)それらの学生の多くは実習生の関わりを賞賛的に捉えている。観察者は実習生の子どもに寄り添うとは全て子どもの言いなりになることではなく肯定しながらも、行為の奥に潜む意味を洞察し試行錯誤を繰り返し新しい方向付けをしていったことを賞賛し大きな刺激を受けている。「子どもの気持ちに寄り添う関わりとは？」(事例7・8・9・17)について省察会の場で話し合い保育者の専門性について深めていく題材となった事例である。

事例12 「私たちも頑張ろう！」 2回目実習生(意欲・自信)

1回目のグループ実習を観察して、みんなが本当の先生のように振る舞っていて、緊張の色が全然なくて、すごいなと感じました。子ども達も実習生も楽しんでいる姿を見て、「私もこんなグループ実習にしたい」と思い、意欲が湧きました。省察会の時、反省点がたくさん出ていて、とても良いグループ実習だったのにも思っていたのですが、それも踏まえた上で私達のグループ実習を良いものにしようと意欲に繋がりました。

事例13 「同じ2年生なのに…」 2回目実習生(意欲・自信)

私は2回目の担当でしたので、第1回、第3回のさくら組の実習を観察させて頂きました。実習生の子どもへの声掛けや子ども達の前に立って楽しそうにお話する姿を見て、同じ2年生なのに違うな～本当の先生みたいだな～と感じました。自分だったらこんなに上手な声掛けは思いつかないな、と焦りも感じましたが次の実習では私もこんな風になりたい～！という気持ちがみんなの姿を見たことで大きくなりました。

<考察>

事例12・13は共に子ども達と自然体で楽しく遊ぶ実習生の姿を見て「本当の先生のように振る舞っている」と捉えている。学生たちはややもすると実習生の思うように子どもをリードしている姿に先生らしさを感じたり、そうあるべきと思いがちである。ここでは「子どもと一緒にいる保育者」を本当の保育者と捉えている。この保育者像は自分の理想の保育者のイメージとして大切な気づきであると考えられる。実習に当たり他者の実習を観察し自分の姿をイメージできる力も実習力の一つとなつていそうである。客観的な立場での観察は自分ならこの様な場面での様子に対応、言葉かけをするかなどを冷静に考え、学ぶことができる有効な場である。更に事例12は省察会での振り返りは自分以外の多くの見方・感じ方があることを知り観察や省察会が次への意欲に繋がった。事例13では自分との差に不安を感じた事例である。同じ学生でもそれぞれ実習力には差がある、しかし経験ある現場の保育者ではなく自分と同じ学生ということで焦りを感じつつも気持ちを切り替えることができ、より意欲へと繋がった。

事例14 「“それ感”を出す工夫」 3回目実習生(1回目振り返りレポート)

1回目を観察して、試練の道？はなんとなく障害物競走のような印象を受けました。そう見えたのはきっと“それ感”がなかったからだと思います。例えば魔法でおにぎりに変身して、コロコロとマットの上を転がるといふ活動では子ども達が今自分はおにぎりに変身して転がっているんだ！というイメージが少しつきにくかったかなと思いました。子ども達をその気にさせるためにはBGMをつけて気分を乗りやすくしたり、おにぎりの道の前におにぎりの絵などを描いて視覚の面でも子ども達に分かりやすいような工夫がもう少しあればもっと良くなったと思います！

<考察>

1回目、年中2クラス合同で行った「1日魔法使いになろう！」という実習を観察者の立場で客観的に見ること、子ども達にとって環境構成がいかに大切になるかを理解している。保育経験の少ない学生にとって子ども達に“魔法の国”をイメージしなるといふ楽しさや内容への関心、理解をしてもらうための環境構成を学生らしい言

葉で“それ感”と表現しその工夫の重要性を捉えている。身近な素材からこんなものも使える、こんな風にしたらそれらしく見えるなどグループ内で話し合いながら想像(創造)をめぐることで実習力としての柔軟な発想やコミュニケーション力が生まれる。視覚・聴覚・触覚などの五感を使い子ども達が世界観に入り込みその気になって楽しく、更には自主的に活動できるような環境構成を考えることは事例4同様である。3回目(園全体の水遊び)の実習生としてより充実した環境構成を考える意欲に繋がったと考える。

振り返りの段階

① 省察会

事例15 「素直に嬉しい」 2回目実習生(意欲・自信)

実習中は自分の担当と子ども達への対応で追われ、終わった直後は「全然上手くいかなかった…ポロポロだ…」とダメなところばかり思い返されて正直落ち込みました。しかし、……省察会で良かった所、こうしたら良かったという部分を客観的に反省することが出来て、ダメなところもあったけれど、良いところもちゃんとあったんだ！と知ることが出来ました。誰かに「良かったよ」、と言われることは素直に嬉しかったし、まだまだ進化しなければいけないところはたくさんあるけれど、少し自信が持てました。

<考察>

実習した学生の典型的な事例である。実習中は子どもとの関わりや時間通りに進行することに夢中であり実習終了後は終わったことへの解放感を持つと同時に「あーすればよかった」「あの声掛けはまずかった」など失敗した所ばかりが気になり挫折感を感じる学生が多い。誰もが感じる失敗感とも言えよう。ここでは省察会での同級生や担当保育者からの感想などが実習生への自己肯定観をもたらし、さらに自信と向上への意欲が感じられる。省察会の大きな役割とも言えよう。

事例16 「予想して予想して予想する毎日」 2回目実習生(実習後振り返りレポート)

…一ついい案がでると一つ悪い予想が出てきてしまうという連続である程度流れが完成するまでに色々な案を出し合いました。保育者になったらこれほどまでの規模ではなくても毎日予想して予想して予想する毎日なんだという事が身に染みてよくわかりました。6人でたくさん予想をしてもやはり予想外の事は起こってしまうので、そこをどう解決するかが大切なのだなと感じました。ただ悪い予想外ばかりではなく、こういう風に動いてくれた！やここでも楽しんでくれるんだ！などの嬉しい想定外もたくさんありました。どんなに大変な仕事でも、こういうことがあるから保育者はやっぱり素敵な職業だと改めて思いました。

<考察>

2回目以降だからこそ出てきた内容のレポートと言えよう。話し合いの大変さと実践でのギャップが意欲に繋がっている事例である。いかに時間をかけ話し合いを重ねたかが文面から溢れている。日々振り返ることで子どもの姿を予想することの大切さと、いくら話し合いを重ねても実際には何が起るか想定しきれないことに気づき、その想定外のことが起こった時にこそ仲間と協力し合いグループで多様な対応を考えだすことにやりがいも感じている。更に事例8同様、子ども達が自分たち(実習生)の考えた内容だけではなく子ども達なりの発想で楽しむ姿を良い意味での想定外と捉えることができています。日々の保育を決められた内容で過ごすだけではなく今日何が起きるのだろうかと言うワクワク感を持ちそのような子ども達と関わる事が出来る保育者になりたい意欲が実習力に繋がっていると考える。

事例17 「残念…」 1回目実習生(意欲・自信)

タンバリンを子ども達にたたいてもらうところで、本当は子どもにタンバリンを渡さない予定でした。でも、R君がタンバリン貸してと言うようにタンバリンを欲しそうにしていました。それまでR君は走り回ったりして活動の輪に入ろうとしていなかったのですが、タンバリンに興味があるのか！と嬉しく思い私はR君にタンバリンを渡してしまいました。私はこれでみんなと同じようにR君も、私たちの実習を楽しんでいると思ってもらえれば

良いなという思いで渡したのに、観察の人にはあそこでタンバリンは渡すべきではなかったと言われました。実際タンバリンを持ったR君は独り占めして、床にたたきつけたりと確かに渡したのは間違いだったと思いました。その場にはあまり良くない対応をしてしまったことに対して自分自身少し残念でした。

〈考察〉

R君(年少クラス)に対して自分としてはR君の気持ちを大切に気持ちに寄り添い自分たちのやり方を無理に押し付けるのではなく少しでも関心をもち楽しんでもらいたいと考えてとった行動である。しかし省察会の場で観察者に自分の行動を批判的に捉えられ観察者との受け止め方の違いを感じた事例である。そして自分の対応が間違いだと認め残念な気持ちで終わってしまった。タンバリンを渡さなければどうなっていたのか？他にどの様な声掛けや関わりがあったのだろうか？子どもの気持ちに寄り添う関わり(保育者の資質を考える)として事例7・8・11同様、省察会の場で更に話し合いを深めていくべき内容でもある。

4. 全体的考察と今後の課題

考察の結果、意欲・自信に繋がっている場面の根底には保育者としての基本となるべき子どもの気持ちに寄り添い、子どもの内面に迫り子ども達と楽しさを共有したいという思いがあった。準備段階ではグループでの話し合いを重ね、ねらいに沿った内容などを考え出していく、その考えがまとまっていく達成感や子どもの反応をイメージする楽しさ等が、実践段階では同級生や担当保育者からの刺激とほめられ体験さらには子どもの予期せぬ反応への驚き体験等が、省察段階では振り返りから見えてくる子どもとの多様な関わり方の経験等が実習力アップとなり次回実習への意欲や期待に繋がっていることが見えてきた。仲間からの刺激は第三者として客観的に実習を観察する立場と、一緒に実習を行うメンバーから受けたものが多かった。現場の経験ある保育者が行う保育を観察することも大きな学びとなるが、同級生の行う実習はより身近に感じられ自分に置き換えて「私も真似したい」「私でも出来る！」「私ならこうしたい。」「○○さんのように明るくハキハキと…」などの具体的な学び(実習力)が刺激となり意欲に繋がっていることが分かる。またほめられ体験は省察会を重ねる中で、担当保育者や観察者などから自分の頑張りを認められることでありそれは自己肯定感に繋がりそれらを素直に嬉しいと感じ意欲や自信へと繋がっている。「ほめられ体験」は学生にとって実習への意欲や自信に大きく結びついているのである。子どもとの関わりからの気づきは、実践・観察どちらからも捉えられ省察会の場で共有し更に深い学びとなっていく。これらの結果は今までの研究でも言われてきたことでもある^{6・7・8・9・10・11・12}。その結果を踏まえての授業が実習力に繋がっていることが考察されたことは、今後授業を進めていくうえでの大きな力となる。しかしこれらは意欲・自信に繋がらないと感じた事例と表裏の関係になることも分かった。グループで話し合う事で意見がまとまらない、保育観が違う、意欲自体にも個人差があるなどの様々な理由で限られた時間での計画の進行が困難になり、次第にやる気がなくなり意欲を失っていく場面も多々あげられた。また自分たちの頑張りが良く評価されなかったり、省察会の場で子どもとの関わり方を否定される、同級生の実習から刺激を受けるが自分との実習力の違いを感じ意欲や自信をなくすことにも繋がった。

誰も「失敗したくない」「間違いたくない」と考える。しかし実習は「失敗から学ぶ」「失敗しても大丈夫！」「不安のない実習生はいない」と理解し失敗感が次回への向上心や意欲に繋がるような気持ちへの援助こそが指導者(授業担当)に求められる。実習力アップにとって実践後の振り返りの意義は大きい。省察会などで振り返ることで実習力の違いに気づくことができそこを埋める努力をすること、更に話し合いや模擬保育などでの子どもの姿を予想することを習慣化し子どもとの関わりを多様にイメージできることが実習力をアップさせることと言えるだろう。初心である「保育者になりたい！」という意欲を持って実習に臨めるよう、指導者(授業担当)が学生に意識化させる配慮も必要となる。

更には本研究では進めることのできなかつた、意欲を持って実習に臨んだ学生たちが現場での学外実習の中でどの様に実習力を発揮することができたかは、今後の課題となる。

5. 参考資料 グループ実習

保育科2年次の保育技術演習の授業内容である。附属幼稚園において、前期3回(各自実践1回・観察2回)グループでの実習を行っている。6クラス(年長, 年中, 年少各2クラス)に分かれ1回につき1クラス5名~6名のグループで実習を行う。附属幼稚園からのテーマに沿い、子ども達の姿をイメージし発達段階を考え楽しさを共有できる内容を考え実践する。

グループだからこそできる環境作りや子ども達の自主性を重んじる内容を話し合い、計画し、実践、振り返り(ビデオ, 附属幼稚園でのクラス単位の省察会, 全員での学内省察会, 各自レポート)学生はこれらの一連の活動を通し今後の実習体験に活かす意欲に繋げる。その循環の中で保育者としての資質や友達の普段の姿とは違う一面に気づき、刺激を受け吸収する。更には子どもの動きをイメージすること・子どもとの関わりからの新鮮な気づきや驚き・コミュニケーション力やチームワークなど多くの実習力を学んでいく。

附属幼稚園との連携を密にした授業として、1年次は通年週1回(1時間)テーマに沿った観察を行い大学に戻り、今観察してきた内容への気づきや質問を話し合い、各々が次週にレポートを提出する。「子どもとは…」「保育者とは…」など保育の基礎について学ぶ。1年次2月~3月にかけて一人3日間の参加実習体験を8時半から4時までで行い今まで観察していた子ども達と関わり更に降園後の保育者の仕事も体験する。2年次にはローテーションで各クラスに前, 後期各2日(午前のみ)個人で参加実習体験をする。その実習体験では担任の補助的役割の取り方や今の子ども達の姿を知ることが出来る。

1年次の観察や参加実習, 2年次の個人実習 更に他の授業での学びを最大限に活かしグループでの実習を行う。

グループ実習の概要と過程



写真1 年長クラスでの打ち合わせ



写真2 年中2クラス合同での打ち合わせ

打ち合わせ・準備段階

①附属幼稚園担当保育者と実習内容の打ち合わせ(3回分)

- ・担当保育者から、設定保育の大枠のテーマが提示される。
- ・附属幼稚園のカリキュラムに沿って、それぞれの年齢や季節にあったテーマ(2016年度)
1回目「保育室でできる簡単なゲーム・表現遊び」
2回目「お話の世界に入ろう」「園外保育」
3回目「園全体での水遊び」

『担当クラスの保育者から今の子ども姿や内容についての説明を学生は真剣に聞きメモを取ります。スタート時点の緊張の場面です。』

実習力アップに繋がる学び

- ・内容を理解し聞きとる
- ・的確にメモをとる
- ・積極的に質問をする



写真3 指導案話し合い



写真4 指導案作成



写真5 同じものを数十個作ることも



写真6 大掛かりな環境構成(園全体水遊び)

②内容検討・指導案下書き

- ・6グループ(年長, 年中, 年少 各2クラス)に分かれ内容を話し合う。(大学担当教員が話し合いに参加しアドバイス)
- ・内容を決定し指導案(下書き)を附属幼稚園に提出する。
- ・後日, 附属幼稚園担当保育者と話し合いアドバイスを受ける。

③指導案清書

- ・アドバイスを受けた内容を持ち帰り見直し話し合いを重ね子ども達の行動を予測しながらより詳細な指導案を作成する。

『学生が最も頭を悩ませる期間です。ねらいは? 言葉掛けは? 環境構成はもっと良くならないかなどより充実した指導案作成の為に話し合いは放課後にまで続きます。』

実習力アップに繋がる学び

- ・テーマに沿った内容を考える
- ・子どもと楽しさを共有できる内容を考える
- ・グループで話し合いながらお互いの気持ちを尊重し合う(コミュニケーション力)
- ・メンバーの発言からの気づき
- ・現場の保育者からの学び

④環境構成(製作物の準備)

- ・それぞれの内容に必要な環境作りを細かいもの, 大掛かりなものをイメージし話し合い作り出す。
- ・想像力と創造力を最大限にふくらませ出来る限り身近な素材を使用する。

『グループ内の協力がどんどん深まり団結力が高まる大切な時間です。友だちの意外な力(想像力・創造力など)に気づくこともあります。授業担当以外の先生たちからのアドバイスも真剣に受け止めフル活用します。』

実習力アップに繋がる学び

- ・環境を通して行う教育の意義を知り, 物的・空間的環境を構成する
- ・身近にある様々な物を利用したの教材研究
- ・協力し合うことの大切さ
- ・優先順位を考えること
- ・コミュニケーション力
- ・創造力と想像力

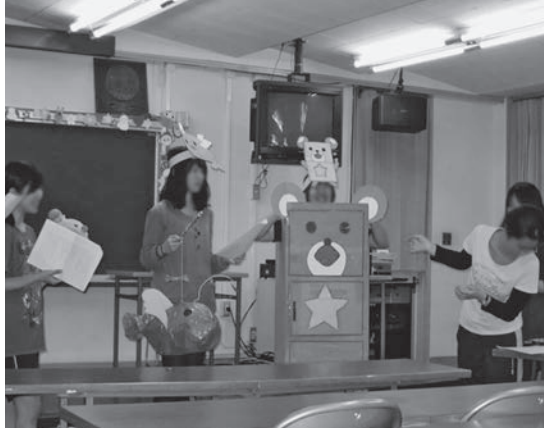


写真7 指導案を見ながら流れを確認



写真8 他のグループの学生が子ども役を



写真9 年少クラス 「ピクニックに行こう！」

⑤模擬保育

- ・指導案を基に流れを確認する。
- ・子どもの行動や気持ちを予測し繰り返し行う。
- ・他のグループの学生が子ども役をする。
- ・作り上げた環境構成も使い本番をイメージする。

『客観的な立場での他のグループの学生(子ども役)からの気づきやアドバイスから流れや言葉掛けなどを更に改善していきます。ここでの友達からの発言やほめ言葉が刺激となり目前に迫った実践への意欲に繋がることも多々あり実習を目前にした有意義な時間となります。』

実習力アップに繋がる学び

- ・子どもの行動を予測する
- ・子どもの気持ちになる
- ・実践をイメージする
- ・改善点を整理し考える

実践・観察(ビデオ撮影含む)段階

⑥実践・観察

- ・8時30分～11時30分まで担任に代わりクラスを担当する。
- ・観察者は実習生と子どもの関わりを中心に様々な視点から記録をとる。
- ・ビデオ担当(交代制)も記録を残す。

『実習当日は模擬保育体験を活かし流れをしっかり把握し実践に臨みます。想定外の行動にもグループの仲間と連携をとりながら子ども達と楽しさを共有し、3時間はあっという間に過ぎてしまいます。』



写真 10 年中クラス 園外保育「シンデレラお助け隊になって大谷大学を探検しよう」



写真 11 年中2クラス合同 「1日魔法使いになろう！」



写真 12 全クラス合同 「わくわく島へ大冒険に行こう！」

実習力アップに繋がる学び

- ・子どもの気持ちを予測して行動する
- ・子どもの気持ちに寄り添う体験をする
- ・子どもの気持ちに寄り添い発想転換をする
- ・子ども達と楽しさを共有する
- ・臨機応変に行動する
- ・チームワーク、連携の大切さを実感する
- ・安全への配慮を心がける
- ・客観的立場での観察・ビデオ撮影により子どもとの関わり方などを自分に置き換え冷静に考える



写真 13 附属幼稚園省察会

振り返り段階(ビデオ・附属幼稚園クラス単位・学内全員・グループ・個人)

⑦附属幼稚園省察会

- ・実習後、観察者撮影のビデオを各々視聴する。
- ・後日(概ね実習1週間後)附属幼稚園にて担当保育者、実習者、観察者でクラス単位の省察会(振り返り)を行う。

『実習生にとって最後の緊張の場面です。実習から一週間後自分たちが行った実習を現場の保育者、観察者はどの様に評価してくれるのか期待と不安でいっぱいです。この振り返りの中での学びが自信や意欲に繋がります。』

⑧学内省察会

- ・附属幼稚園での振り返り内容を基に学内にて全員で振り返りを共有する。

『〇〇くんへの対応はあれで良かったのだろうか？ 〇〇さんの言葉掛けは〇〇くんに寄り添っていたと思う。などより具体的な話し合いが持たれます。』

実習力アップに繋がる学び

- ・ビデオ視聴し自分や他の実習生の表情や動きを知る
- ・様々な捉え方感じ方考え方に気づく
- ・自分の考えをまとめて話す力を持つ
- ・自分の良さや改善点に気づき向上心を持つ

⑨指導案見直し修正提出(クラス単位)

- ・省察内容を踏まえ、時間の訂正や言葉かけを増やすなど実践したからこそ気づけたことを新たに付け加えた指導案を大学担当教員に提出する。

⑩各自振り返りレポートを提出(担当教員)

- ・実習生、観察者それぞれの立場で最終振り返りのレポートとなる。

* この行程(1回の実習・2回の観察・3回の附属幼稚園省察会・3回の学内省察会・3回の振り返りレポートの提出)を繰り返す。

謝辞

本研究は本学学生の為に年間を通し実習の場を提供して下さっている附属幼稚園園長先生はじめ諸先生の皆様のご協力、さらには実習体験をレポートした学生の皆さんの記録に拠るところが大きい。ここに記して感謝申し上げます。